

[B年] 降誕節第2主日(2023年1月1日)**【旧約聖書日課】サムエル記上 1章20～28節**

20ハンナは身ごもり、月が満ちて男の子を産んだ。主に願って得た子供なので、その名をサムエル(その名は神)と名付けた。

21さて、夫エルカナが家族と共に年ごとのいけにえと自分の満願の献げ物を主にささげるために上って行くとしたとき、22ハンナは行こうとせず、夫に言った。「この子が乳離れしてから、一緒に主の御顔を仰ぎに行きます。そこにこの子をいつまでもとどまらせましょう。」

23夫エルカナは妻に言った。「あなたがよいと思うようにしなさい。この子が乳離れするまで待つがよい。主がそのことを成就してくださるように。」ハンナはとどまって子に乳を与え、乳離れするまで育てた。24乳離れした後、ハンナは三歳の雄牛一頭、麦粉を一エファ、ぶどう酒の革袋を一つ携え、その子を連れてシロの主の家の上って行った。この子は幼子にすぎなかったが、25人々は雄牛を屠り、その子をエリのもとに連れて行った。26ハンナは言った。「祭司様、あなたは生きておられます。わたしは、ここであなたのそばに立って主に祈っていたあの女です。27わたしはこの子を授かるようにと祈り、主はわたしが願ったことをかなえてくださいました。28わたしは、この子を主にゆだねます。この子は生涯、主にゆだねられた者です。」

彼らはそこで主を礼拝した。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙12章1～8節

1こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。2あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにしてお自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。3わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。4というのは、わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っている。すべての部分が同じ働きをしていないように、5わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。6わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っていますから、預言の賜物を受けていれば、信仰に応じて預言し、7奉仕の賜物を受けていれば、奉仕に専念しなさい。また、教える人は教えに、8勧める人は勧めに精を出しなさい。施しをする人は惜しまず施

し、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は快く行いなさい。

【福音書日課】ルカによる福音書2章21～40節

21八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である。

22さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。23それは主の律法に、「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。24また、主の律法に言われているとおりに、山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げるためであった。

25そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。26そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。27シメオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。28シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。

29「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり

この僕を安らかに去らせてくださいます。

30わたしはこの目であなたの救いを見たからです。

31これは万民のために整えてくださった救いで、

32異邦人を照らす啓示の光、

あなたの民イスラエルの誉れです。」

33父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いていた。34シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。

35—あなた自身も剣で心を刺し貫かれます—多くの人の心にある思いがあらわにされるためです。」

36また、アシェル族のファヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。非常に年をとって、若いとき嫁いでから七年間夫と共に暮らしたが、37夫に死に別れ、八十四歳になっていた。彼女は神殿を離れず、断食したり祈ったりして、夜も昼も神に仕えていたが、38そのとき、近づいて来て神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した。

39親子は主の律法で定められたことをみな終えたので、自分たちの町であるガリラヤのナザレに帰った。40幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

サムエル記上 1章20～28節

20やがて、ハンナは身ごもって男の子を産んだ。彼女は、「主に願って得た子だから」と言って、その名をサムエル (=「その名は神」の意) と名付けた。

21さて、夫エルカナが家族の皆と共に、年ごとのいけにえと自分の誓願の献げ物とを主に献げるためによつて行こうとしたとき、22ハンナは行こうとせず、夫に言った。「この子が乳離れしたら、この子を連れて行きます。この子は主の前に出て、そこにいつまでもとどまります。」23夫エルカナは妻に言った。「あなたが良いと思うようにし、この子が乳離れするまでとどまっていなさい。主のお言葉どおりになるように。」

ハンナはとどまり、乳離れするまで子に父を与えた。24やがて彼女は、その子を乳離れさせると、三歳の雄牛一頭、麦粉一エファ、ぶどう酒の入った革袋一つを携え、シロにある主の家にその子と共によつて行った。その子はまだ幼かった。25人々は雄牛を屠り、その子をエリのもとに連れて行った。26ハンナは言った。「祭司様、あなたは生きておられます。私はここであなたのそばに立って、主に祈っていた女です。27私はこの子を授かるようにと祈り、主は私が願ったことをかなえてくださいました。28私はこの子をその生涯にわたって主にお委ねします。この子は主に委ねられた者です。」

彼らはそこで主を礼拝した。

ローマの信徒への手紙 12章1～8節

1こういうわけで、きょうだいたち、神の憐れみによつてあなたがたに勧めます。自分の体を、神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたの理に適った〔別訳→霊的な〕礼拝です。2あなたがたはこの世に倣っては〔直訳→この世と同じ形になつては〕なりません。むしろ、心を新たにして自分を造り変えていただき、何が神の御心であるのか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるのかをわきまえるようになりなさい。

3私に与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。分を越えて思い上がることなく、神が各自に分け与えてくださった信仰の秤〔直訳→物差し〕に従つて、慎み深く思うべきです。4一つの体の中に多くの部分があつても、みな同じ働きをしているわけではありません。それと同じように、5私たちも数は多いが、キリストにあつて一つの体であり、一人ひとりが互いに部分なのです。6私たちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っています。預言の賜物を受けていれば、信仰に応じて預言し、7奉仕の賜物を受けていれば、奉仕に、教える人は教える、8勧める人は勧めに専念しなさい。分け与える人は惜みなく分け与え、指

導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は快く行いなさい。

ルカによる福音書 2章21～40節

21八日がたつて割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。胎内に宿る前に天使から示された名である。

22さて、モーセの律法に定められた清めの期間が満ちると、両親はその子を主に献げるため、エルサレムへ連れて行った。23それは主の律法に、「母の胎を開く初子の男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。24また、主の律法に言われているとおりに、山鳩一つがいか若い家鳩二羽を、いけにえとして献げるためであった。

25その時、エルサレムにシメオンと言う人がいた。この人は正しい人で信仰があつて、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。26また、主が遣わすメシアを見るまでは死ぬことがない、とのお告げを聖霊から受けていた。27この人が霊に導かれて神殿の境内に入った。そして、両親が幼子イエスを連れて来て、その子のために律法の定めに従つていけにえを献げようとしたとき、28シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。

29「主よ、今こそあなたはお言葉どおり

この僕を安らかに去らせてくださいます。

30 私はこの目であなたの救いを見たからです。

31 これは万民の前に備えられた救いで

32 異邦人を照らす啓示の光

あなたの民イスラエルの栄光です。」

33父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いた〔別訳→不思議に思った〕。34シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。35剣があなたの魂さえも刺し貫くでしょう。多くの人の心の思いが現れるためです。」

36また、アシェル族のファヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。非常に年を取つていて、おとめの時に嫁いでから七年間、夫と共に暮らしたが、37その後やもめになり、八十四歳になっていた。そして神殿を離れず、夜も昼も断食と祈りをもって神に仕えていた。38ちょうどその時、彼女も近づいて来て神に感謝を献げ、エルサレムの贖いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した。

39親子は主の律法で定められたことをみな終えたので、自分たちの町であるガリラヤのナザレに帰った。40幼子は成長し、強くなり、知恵に満ち、神の恵みがその上にあつた。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・1月1日「降誕節第2主日」の日課主題は「神殿での奉獻」。

・旧約聖書日課は、「サムエル記上」から、預言者サムエルの誕生譚に含まれる箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、キリスト信者としての新しい生活態度を教える一連の箇所の冒頭。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、イエス降誕物語に含まれる神殿参詣の逸話の箇所。

旧約日課(サムエル上1章より)

・「サムエル記」は、ユダヤ正典「前の預言者」(「ヨシュア記」～「列王記」までの四書)の第三に置かれた「ユダ・イスラエルの王国草創期」を物語る文書。便宜上、上下巻に区分されて扱われてきた。上巻は、ベニヤミン族出身のサウルがはじめて「イスラエル」の王として統治した時代を描き、下巻は、ユダ族出身のダビデが「ユダとイスラエル」の王として統治した時代を描く。この二人の王権を「神の選び」として保証する存在が、本文書の呼称にもなっている「サムエル」である。サムエルは、サウルが王として統治する以前の「シロの神殿」で祭司となり、「シロの神殿」が破壊された後も、イスラエル諸部族の間で「士師」と同様の役割を果たした人物として描かれる。このサムエルが、サウルおよびダビデに「油を注ぐ」儀式を授けて王位を得させたとするのが、本文書の基本的な設定である。これによって、「サムエル記」は、「ユダおよびイスラエル」の王王国の成立根拠として「王権神授」の観念を明確に打ち出している。

・世界史上、いわゆる「王権神授説」は中世以降のヨーロッパで君臨した王権を絶対化する思想として知られるが、古代メソポタミア地域においても王を「神の代理人」とする一種の「王権神授」観が普遍性を持っていた。ただし、古代メソポタミアの「王権神授」観は、宗教的権威に対する広範な信頼が基底にあったとされる。すなわち、宗教的権威と対峙する王権というよりは、宗教的権威と協力関係を築くことによって王権を承認・維持させるように働いた。なお、同時代の古代エジプトでは、「アメン」神官をはじめとする宗教的権威が一定の権力集団として存在した一方で、王(ファラオ)は自らが「現人神」であることを主張して王権を正当化することが一般的で、宗教的権威と王権との間には常に対立的な関係性が存在したとされる。「イスラエル」および「ユダ」の王国は、基本的に「メソポタミア型」の王権観に立っていたと考えられる。

・日課箇所は、サウルとダビデの王権を宗教的権威によって承認した存在として位置づけられる「サムエル」の誕生譚の一部である。サムエルの誕生譚は、上述の「王権神授」の観念をより確固とするものとして、サムエル自身が「神の選び」によってその役割を担う者として生まれたことを示すものとなっている。

・「シロの神殿」は、かつてモーセの後継者ヨシュアによってカナン地方定住が始められた際に、シナイ山以来の「臨在の幕屋」をシロの地に設けたことから始まった聖所とされている(ヨシュア18章)。「ヨシュア記」では、ヨシュアの率いた民の一体性を象徴する地として、エバル山とゲリジム山に挟まれた峡谷の地「シケム」がより重要な場所として描かれている(ヨシュア8:30以下、同24章)。「シケム」は、「列王記」がソロモン王崩御後に分裂した北王国「イスラエル」の拠点として描いており(王上12章)、北王国「イスラエル」のアイデンティティを共有する北部部族においては、歴史的に重要な意味を持っていたと考えられる。一方、「シロ」については、サムエルの時代にペリシテ人によって破壊されて以降、そこに収められていた「神の箱」も流浪の状態になるが、サウルの時代の後に王権を確立したダビデがその「神の箱」と共に「シロ」の「預言者=祭司」を自らの王国の庇護の下に置いたものとしており、ソロモン王の建てた王立神殿「エルサレム神殿」には「神の箱」が至聖所に安置されるなど、「シロの神殿」を継承しているものとして位置づけられている。

・日課箇所で描かれるサムエル誕生譚は、その母ハンナを中心に描かれている(サム上1~3章)。「サムエル」に対する「神の選び」を、さらにその母および父の信仰にまで遡って基礎づけようとしている。

使徒書日課(ローマ12章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれてきた書簡文書で、パウロの神学思想をもっとも体系的に表したものとみなされてきた。とは言え、パウロはこの書簡を「神学論文」として著したわけではなく、あくまで宛先教会の状況を踏まえた主題設定のもとに展開している。この書簡を著した時点で、パウロは、ローマをいまだ訪ねていなかったが、ローマの教会共同体と無縁だったわけではない。パウロ自身が創設に大きく関わった「コリントの教会共同体」は、当初からユダヤ人夫妻アキラとプリスキラの協力を得て形成されたものとして伝えられている(使徒18章)、彼らは明らかに、すでに成立していたローマの教会共同体に属する者たちであった。彼らだけでなく、ローマの教会共同体にすでに属していた者たちが一定の割合でコリントの教会共同体の基礎となったと考えられる。そうであればこそ、コリントの教会共同体には、ローマの指導者として知られるペトロ(ケファ)の影響力が知られるのである(1コリ1章)。パウロは、このコリントの教会共同体形成を通してローマの教会共同体メンバーとの関係を持つようになり、ペトロの指導下にある諸教会共同体と調停的な立場を取るようになったのであろう。

・日課箇所は、キリスト者として生きるようになった者の基本的な生活態度を勧告するまとめ(12~15章)の冒頭を為す。その基本的な視点は、「礼拝者・献身者」としてのキリスト者のあり方である。

福音書日課(ルカ2章より)

・日課箇所は、イエス降誕物語の後半部分(誕生以後)を構成する「割礼」と「神殿詣で」の場面。「ルカ福音書」は、イエス降誕物語を、「サムエル記」のサムエル誕生譚を下敷きに構成していると考えられる。すなわち、サムエル誕生譚を構成する「母に対する告知」(サム上 1:1~19)、「誕生と神殿への初子奉獻」(同 1:20~28)、「母の祈り」(同 2:1~10)、「神殿における幼少期の逸話」(同 2:11~3:21)のいずれもが、イエス降誕物語の構成要素となっている。日課箇所は、このうち「誕生と神殿への初子奉獻」の後半に相当する。

・日課箇所で描かれる神殿参詣は、初子誕生に伴うもので、「律法」に基づく儀式を行うためのものである。23 節「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」は、「出エジプト記」13 章に基づく規定で、初子男子のための贖いの犠牲を献げることが求められている。一方、24 節の「山鳩一つがい、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げる」は、「レビ記」12 章に規定される、母親の出産にまつわる「汚れ」の清めの儀式に用いる犠牲奉獻である。これらは標準的なユダヤ人の中で習慣化されたものであるが、「ルカ」は、これらによって、「士師記」13 章の「サムソン物語」で描かれるような「ナジル人としての奉獻誓願」(民数記 6 章も参照)を重ね合わせているとする見方もできる。サムソンの母のもとにも御使いが顕れて男子誕生が告げられている。

・「シメオン」は、「ルカ福音書」がここで伝えている以上のことは、教会伝承でも知られていない。通常、「女預言者」として登場する「アンナ」と同様に「預言者」として位置づけられる。紀元 1 世紀当時のユダヤ教制度の中に「預言者」は位置づけを持っておらず、初代教会が「洗礼者ヨハネ」を含めて「預言者」を旧約の伝統継承者という役割の中に位置づけようと意図してなされたことと考えられる。なお、旧約聖書中の「預言者」のほとんどは「宮廷預言者」であり、体制内で王に助言する立場で「預言」を告げていた。

・29~32 節は「シメオンの賛歌(ヌク・ディミッティス)」と呼ばれ、「マリアの賛歌(マニフィカート)」および「ザカリアの賛歌(ベネディクトゥス・ドミヌス・デウス)」と共に初期教会で導入された典礼文と考えられている。「シメオンの賛歌」は、東方および西方教会の伝統で聖務日課の「晩課(終課/晩禱)」で歌われてきた。

来週の誕生日 (1月1日~7日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-268 番「朝日は昇りて」(= I 97)は、日本人が作詞作曲し 1881 年版『讃美歌』から歌い継がれてきた。作詞は奥野昌綱(ヘボンの日本語教師、ブラウンの聖書翻訳助手などで活躍)。当初、木岡英三郎の作曲が付されていたが、1931 年版から鳥居忠五郎の作曲で歌われている。

- ・21-51 番「愛するイエスよ」(I-19 番「みこえきくとて」)は、17 世紀ドイツの牧師クラウスニツァーの作詞で、各国で広く歌われている讃美歌。「説教の前に」という原題が付されている。曲は、17 世紀ドイツの教会音楽家アーレの作曲で、最初はアドヴェントの独唱曲のために作られたが、後に出版された讃美歌集でクラウスニツァーの歌詞と組み合わせられた。
- ・21-472 番「朝ごとに主は」は、20 世紀前半のドイツの宗教詩人ヨッヘン・クレッパの宗教詩集『キリエ』(1938 年)所収の「朝の歌」にツェベライが曲を付けた讃美歌。クレッパの詩はイザヤ 50:4 に着想を得ている。

21-51「愛するイエスよ」***Liebster Jesu, wir sind hier, dich und dein wort***

1. Liebster Jesu, wir sind hier, / Dich und Dein Wort anzuhören; / lenke Sinnen und Begier / hin auf Dich und Deine Lehren, / dass die Herzen von der Erden / ganz zu Dir gezogen werden.
2. Unser Wissen und Verstand / ist mit Finsternis verhüllet, / wo nicht Deines Geistes Hand / uns mit hellem Licht erfüllet; / Gutes denken, tun und dichten / musst Du selbst in uns verrichten.
3. O Du Glanz der Herrlichkeit, / Licht vom Licht, aus Gott geboren, / mach uns allesamt bereit, / öffne Herzen, Mund und Ohren; / unser Bitten, Flehn und Singen / lass, Herr Jesu, wohl gelingen.

21-472「朝ごとに主は」***Er weckt mich alle Morgen***

1. Er weckt mich alle Morgen, / Er weckt mir selbst das Ohr. / Gott hält sich nicht verborgen, / führt mir den Tag empor, / daß ich mit Seinem Worte / begrüß das neue Licht. / Schon an der Dämmerung Pforte / ist Er mir nah und spricht.
2. Er spricht wie an dem Tage, / da Er die Welt erschuf. / Da schweigen Angst und Klage; / nichts gilt mehr als Sein Ruf. / Das Wort der ewgen Treue, / die Gott uns Menschen schwört, / erfahre ich aufs neue / so, wie ein Jünger hört.
3. Er will, daß ich mich füge. / Ich gehe nicht zurück. / Hab nur in Ihm Genüge, / in Seinem Wort mein Glück. / Ich werde nicht zuschanden, / wenn ich nur Ihn vernehm. / Gott löst mich aus den Banden. / Gott macht mich Ihm genehm.
4. Er ist mir täglich nahe / und spricht mich selbst gerecht. / Was ich von Ihm empfahe, / gibt sonst kein Herr dem Knecht. / Wie wohl hat's hier der Sklave, / der Herr hält sich bereit, / daß Er ihn aus dem Schläfe / zu seinem Dienst geleit.
5. Er will mich früh umhüllen / mit Seinem Wort und Licht, verheißen und erfüllen, / damit mir nichts gebricht; / will vollen Lohn mir zahlen, / fragt nicht, ob ich versag. / Sein Wort will helle strahlen, / wie dunkel auch der Tag.